

待って教へる

次の話はある幼稚園で実際にあった話である。先生が黒板に“悪魔”といふ漢字を書いて、「この字が読める人？」と尋ねたところ、誰も答へる子があなかったので、「では、この字が何と読む字か、教へてあげませう」と言った。すると、子供たちは「先生、待って。私(僕)たちに考へさせて！」と言ったのである。

先生はその時、「馬鹿な事を言ふものだ。読めない字をいくら考へたつて読めるやうになるわけが無いのに……」と思ったさうであるが、子供たちの言ふままに待つことにした。すると、子供たちは早速、話し合ひを始め、「下の方の字には“鬼”といふ字があるよ。だから、きっと鬼の仲間だよ」といふ意見から、到頭「アクマではないか」といふ結論に達し、「先生、その字はアクマといふ字ではありませんか」と言った、といふ事である。

幼児にはかういふ能力があり、幼児はこの能力を働かせたがっているのである。だからこそ、難しいはずのテニヲ八や活用が、僅か二年ほどの間に正しく使ひこなせるやうになるのである。

だから、幼児にテニヲ八の使ひ方や活用の変化の仕方を教へてやる必要が無いのである。いや、必要が無いといふよりも、教へてやって

はいけないのである。なぜなら、教へてやったら、幼児は自分で頭を働かせる必要が無くなるので、頭が働かなくなり、従って、頭の働きが発達しないと思はれるからである。

脚を使へば脚が丈夫になるやうに、頭を使へば頭の働きが良くなる。その反対に、脚を使はないでみると脚が弱くなるやうに、頭も使はないでみると頭の働きが弱くなる。だから、子供が考へれば解るやうな事については、決して教へてやらないのが良いのである。

今の教育は、知識を重視してゐて、知識を子供の頭に豊富に詰込んでやるのが主な教育である、と思つてゐる節がある。だから、何でもかんでも教へてやるばかりで、子供が疑問を懐くのを待つ、といふ事の大切さを知らない。

幼児期ほど、物事を深く、広く考へ、疑問を抱く時期は他に無い。だから、親の手に負へない程よく質問をするのである。幼児期の幼児には、誰でも皆このやうな本性があるので、教育の仕方によっては実に進歩が目覚しいのである。

ところが、子供が疑問を感じずる前に、何でもかんでも教へてやる親が多い。然し、こんな事ばかりしてゐると、次第に疑問を感じずる本性が働かなくなり、当然疑問を感じなければをかしいやうな事柄についても、全く疑問を感じない人間になってしまう。それは、「脚を使はないで

れば、脚が自然に弱くなる」といふ原理と同じものである。

だから、教へてやりたくても教へてやらないでゐて、子供が疑問を感じてそれを「質問して来るまで待つ」といふことが大切なのである。同じ説明でも、自分がした質問に対する説明には、食ひ入るやうな表情で聴くことは、読者もよく御経験のことと思ふ。この真剣に聴く態度が、その説明の内容を確実に把握させると同時に、疑問を解決した時の喜びの体験が子供の向学心に何よりも役立つのである。